

毎月11日掲載

防災・減災のページ

第79回ワークショップ @岩沼・里の杜3丁目地区

むすび塾

地区内巡視の後、参加者は地区内の集会所で語り合いに臨んだ。

町内会副会長の雨貝信治さん(60)は「津波被害はなかったとはいえ、近くを流れる阿武隈川による浸水を不安視する声がある」と述べた。地区内の大雨被害の写真を目にした住民の飲食店店主孝次さん(58)は「危険な場所を知らない人もいる」と語り、防災マップの必要性を強調した。

東日本大震災の被災体験を振り返る場面もあり、災害時

岩沼市東部にある里の杜3丁目地区は標高が低い平野部のため、豪雨の浸水被害に見舞われてきており、自主防災組織づくりに向けた議論が始まっている。

参加者は大雨の際の危険な場所を確認するため、地区内を全員で巡視した。

昨年10月の台風21号の影響で30〜40センチの高さまで冠水した場所を歩いた後、同地区町内会長の明石良一さん(70)は「浸水被害は地域の重大な問題。防災マップを作り、危険な場所を周知したい」と強調した。

自主防災組織 在り方探る

河北新報社は6月24日、通算79回目の防災巡回ワークショップ「むすび塾」を岩沼市里の杜3丁目地区で開いた。地区住民ら10人が参加。地域でできる防災の取り組みをテーマに、東日本大震災の教訓や自主防災組織の在り方について意見を交わしながら、日ごろの備えの大切さを確認した。

■むすび塾に参加して



●住民交流活発に 住民同士がつながりを深められる活発なまちづくりを考えたい。日々の付き合いや小さな取り組みが災害時に力を発揮することもあると思う。交流の中から共助の意識が自然と生まれるのが理想。趣味サークルやイベントへの参加を呼びかけた。里の杜3丁目町内会会長・明石良一さん(70)



●情報共有が課題 高齢化が進む町では、家の中にこもりがちな住民に大切な情報が伝わりにくいことが課題だ。東日本大震災後、環境は変化している。災害情報を発信する方法や、共有するための手段をしっかりと検討し、地域へ周知していかねばならない。里の杜3丁目町内会副会長・雨貝信治さん(60)



●母親世代つなぐ 里の杜地区で、大雨による浸水被害があったことはあまり共有されていない。子ども3人を育てているが、岩沼市は若いお母さんが多く、核家族世帯がほとんどなのでつなぐ力が弱い。災害は人ごとではなく、身近なものとしてコミュニケーションを活発にしていきたい。保育士・三浦未穂さん



●地域の連携必要 地域の道路で大雨のたびに冠水する所を、近くの人にはよく知っている。情報を共有できれば危険を避けられる。震災時、津波被害を受けた沿岸部では顔見知りの住民が高齢者を助けたと聞く。住民も施設も互いに知り合えるといい。災害時は横のつながりが重要だ。施設職員・柳山明さん(33)



●子連れ避難不安 子供会や保育園など、普段顔を合わせるコミュニティで災害時の集合場所を決めておいてはどうか。見つけた親子同士なら避難生活も協力できる。東日本大震災を振り返って見ても、日中、母親が一人で子連れで避難することは不安が大きい。里の杜3丁目町内会副会長・今野幸絵さん(44)



●安否確認工夫を 震災の日には交通渋滞もあり、(宮城県)柴田町の職場から自宅まで車で3〜4時間かけてやっと戻ったが、家族の避難先が詳しく分からず心配になった。地区に災害時の安否情報や避難先が分かるような、情報共有の仕組みがあればとても役立つのではないかと。会社員・日下力さん(45)



●話し合う場必要 自主防災組織をつくるには、まず住民同士がしっかりと話し合う時間を確保するという壁がある。みんなで集まる場を設けることから考えたい。組織ができて、仕事の都合で活動に制約がある人もいる。それぞれの立場でどんな役割を果たせるのか話し合いたい。飲食店・戸野孝次さん(58)



●さらに地域学が 仕事柄、地域のことには常に詳しく学ぼうとしているが、まだ顔と名前が一致していない住民もいるというのが現状だ。自主防災組織は防災だけでなく、防火、防犯にも貢献できる。市職員。そして一住民としてもっと積極的に地域に関わってほしい。岩沼市防災課課長補佐・森幸幸さん(45)

情報共有、つながり強化



災害への備えとして地域コミュニティのつながりの大切さを確認した語り合い。6月24日、岩沼市里の杜の3丁目地区集会所



岩沼市里の杜地区は、岩沼市が1997年4月から分譲を開始した「東部公共ゾーン」に位置する。同ゾーンには市民会館、市総合体育館、地域災害拠点病院の総合東北病院がある。

阿武隈川の洪水懸念

むすび塾を開いた「里の杜3丁目町内会」は約250世帯約750人が暮らす。東日本大震災では仙台東部道路で津波の威力が減衰され、大規模な被災を免れた。一方、大雨による浸水被害に度々見舞われており、近隣を流れる阿武隈川の洪水を警戒する声もある。

町内会では、分譲当初からの住民の高齢化が進んでいることから、地域の将来を見据え、自主防災組織づくりや阿武隈川の洪水にもらんだ防災マップづくりなどの機運が高まっている。



2014年10月13、14日の台風19号接近に伴う大雨で冠水した地区内道路＝14日、岩沼市里の杜(岩沼市提供)

東北大災害科学国際研究所助教
マリ・リズさん(40)

顔合わせの場増やそう

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室02(21)15091。

次回のむすび塾は31日、仙台市宮城野区で開きます。

の備えについて、地域の情報が共有の大切さを訴える意見が目立った。

住民の会社員日下力さん(45)は「震災の日に職場から帰宅したら、家族がどこに避難しているか分からず心配だった」と語り、「地区単位で安否情報や避難情報を共有できる仕組みがあればいい」と提案した。雨貝さんは「高齢者のための世帯情報をどう伝えるか、事前に決めておくだけでも安全面が全然違うので

はいいか」と述べた。

自主防災活動の先例を紹介する助言者として参加した同市のたけくま町内会会長の深沢十九一さん(74)は「災害時は、災害時の議論に積極的に参加してほしい」とも連絡をしっかりと取り合ってもらいたい」と述べた。

め、28台の無線機を用意している。日ごろの備えを、里の杜住民から驚きの声が上がった。

同地区の自主防災組織づくりの議論に際しては、土台となる住民間のコミュニケーションの活性化を求める意見が相次いだ。里の杜3丁目町内会副会長今野幸絵さん(44)は「やはりコミュニティのつながりが大事。子供会活動で避難所の場所を教えるなど、小さなことから取り組みたい」と話した。

「女性同士の近所つきあいはあるのに、男性はなかなか進めてほしい」と呼び掛けた。

集まろうとしない」といった指摘も複数の参加者から寄せられた。町内会長の明石さんは「日々のコミュニケーションが避難時の支え合いにもつながるはずだ。もっと集まりが活発になってほしい」と語った。

自主防災組織は災害対策基本法に基づき、公的な防災関係機関の各種活動が居るに比べて、大規模災害発生時の初動段階で、コミュニティで住民がお互いに助け合うことを目的とする。

平常時活動として、地域行事での防災知識の普及啓発活動展開や、消火、避難など訓練の実施に加えて、「防災マップ」作製により危険物集積地域、延焼拡大危険地域、土砂災害危険区域、ブロック塀の安全度の把握、防災資材の備蓄や点検などに取り組む。

35市町村の組織率は82.7%(17年4月現在)。県危機対策課の担当者は「自主防災組織は地域防災のなめ、自主防災組織の活動主体となる防災リーダーの育成など、今後各市町村が行う組織率向上や自主防災組織の強化に向けた取り組みを支援したい」と話した。

たけくま町内会会長
深沢十九一さん(74)

行政任せの発想脱却を

たけくま町内会は、01年に町内会設立と同時に自主防災組織が発足しました。当初は全世帯が新住民の見回りと顔を合わせることで、震災時は組織があったおかげで、何かあったら集まろうという態勢ができていました。

震災3日後、リヤカーを動かすのが大変な状態になりました。班長が意見をまとめて総会に持ち寄り、避難訓練のテーマを設けるなどが有効でした。花見など機会をつくって顔見知りになることが大切だ。できることから始めてほしい。

手始めに洪水時の地図を住民で作製してはどうか。地図に危険箇所をすべて書き入れ、集まりを2、3回重ねればまとめられる。写真を加えてチラシにすれば地域で配って活用できます。

震災から7年、新住民を交えて情報共有し、避難方法を普段から確認して流れて決めておくのもいいでしょう。イベントなど顔を合わせられる機会を設け、楽しみを取り入れながら小さなことを積み上げてほしい。

岩沼市東部にある里の杜3丁目地区は標高が低い平野部のため、豪雨の浸水被害に見舞われてきており、自主防災組織づくりに向けた議論が始まっている。

参加者は大雨の際の危険な場所を確認するため、地区内を全員で巡視した。

昨年10月の台風21号の影響で30〜40センチの高さまで冠水した場所を歩いた後、同地区町内会長の明石良一さん(70)は「浸水被害は地域の重大な問題。防災マップを作り、危険な場所を周知したい」と強調した。

地区内巡視の後、参加者は地区内の集会所で語り合いに臨んだ。

町内会副会長の雨貝信治さん(60)は「津波被害はなかったとはいえ、近くを流れる阿武隈川による浸水を不安視する声がある」と述べた。

東日本大震災の被災体験を振り返る場面もあり、災害時